

2

022年の初夏、英語圏で、チベット人女性作家による長編小説が立て続けに出版された。

1冊はツェリン・ヤンキーによる作品の英訳 *Flowers of Lhasa* (Balestier Press)。やまやまな家庭の問題を抱えて家を出てラサの町に流れ着いた若い女性たちがホステスとなり、狭いアパートで共同生活をしながら支え合って生きていく、シスターフッドの物語だ。そしてもう1冊はカナダ在住の作家ツェリン・ヤンゾム・ラマが英語で書いた小説 *We Measure the Earth with Our Bodies* (Bloomsbury Publishing)。1959年に西チベットから亡命した難民一家の物語で、シャーマンを母にもち、ネパールとカナダで離れ離れに生きるようになった姉妹とその娘世代の生き様を描く。どちらも読みごたえのある魅力的な作品だ。

今、世界的にも女性作家の活躍が目覚ましいが、その流れの中でチベット人女性の文芸創作の営みが可視化されることは嬉しい。特に後者はカナダの新人文学賞にノミネート、フランス語版が刊行されるなど、評判を呼んでいる。筆者もオンラインでいくつかのイベントを視聴して注目度の高さを実感した。そして、この動きと足並みを揃えるかのように、日本でも、今春『チベット女性詩集』（段々社）が刊行された。チベット文学の翻訳に尽力してきた数少ない翻訳者の一人、海老原志穂氏の編訳だ。現代チベットを代表する7名の詩人による27篇の詩と、

ASIA SCOPE

自らの声で謳う チベットの女性たち

文／星 泉（東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所教授）

「フェミニズム運動は詩からはじまった」など7本のコラムからなるこの詩集は、読めば現代を生きたさまざまな年代の女性たちの声をストリートに届けてくれる秀作だ。詩の合間に漫画家・蔵西氏の旅のスケッチを配置するアイディアも楽しい。この創意工夫あふれる画期的な詩集を、少し紹介してみたい。詩集の冒頭を飾るのは、オーストラリア在住の亡命詩人ゾンシユクキによる4篇の詩だ。故郷を離れる前にその決意を綴った「やむことのない流れ」他1篇、最初の亡命先インドで故郷を思って書いた「ふるさとでは」、そして遠く離れた南半球の地で、あふれる思いをぐっと抑えた筆致で綴った「雨音」かななる。チベットになじみのない読者を高原の地にやさしく誘う幕開けとなっている。

この人に続くのが、ベテラン詩人デキ・ドルマによる「妊婦の記録」「母の記録」といった、子を産み育てる女性の姿を描いた作品である。子育ての喜びと不安に共感を覚えたかと思うと、お食い初めには「野ヤクの心臓」を口に含ませる、などというくだりが出てきて、文化の違いにはっとさせられる。

そして特に目を引くのはチベットのフェミニズム運動の旗手ホワモによる「私に近寄るな」という詩だ。「私に近寄るな／私は甘露ではない／私は欲望ではない」で始まる力強い謳い出しのこの詩は、家父長制の中で抑圧されてきた女性の心の解放を謳い上げた絶唱とも言える作品である。この詩人が展開



する女性支援の活動は海老原氏のコラムに詳しい。この他にも抑圧された政治状況を髣髴とさせるチメの「牧畜犬」、若く瑞々しい感性で綴られたオジュクキの「女二十歳」など、読ませる詩ばかりだ。

と

ここで文芸創作に携わるチベット人女性作家の嚆矢として、イシェ・ドルマ（益西卓瑪、またの名を王哲、1925―2014）を挙げねばなるまい。チベット高原東端のチヨネ（現在の甘肅省甘南チベット族自治州卓尼県）の生まれのこの人は、民国期にチベット地区でスタートした漢語教育の恩恵にあずかり、1948年という早い時期に上海の復旦大学を卒業した才媛だ。彼女は新卒で雑誌『新中国婦女』の編集部に加わり、1956年にはチベット人として初めて映画の脚本を書く。そして、その文才を活かして書いたのが、チベット人女性による最初の短編小説『小ホワデン』（原題『小華旦』、少年兒童出版社、1965年）だ。

胡沛萍著『当代藏族女性漢語文学史論』（中央民族大学出版社、2018年）によれば、この小説は封建領主に搾取される残酷な現実から脱して幸福を求める牧畜民小ホワデン一家を描いたものだという。未読ながら当時の政治環境的制約の中で書かれたものと推察されるが、このような時代において活躍した彼女のような人がいたことは記憶に留めておきたい。

ある程度自由に文芸創作ができるようになったの



2022年以降相次いで刊行されたチベット人女性文学（撮影：筆者撮影）

は改革開放後である。長編小説を書いた女性作家に注目すると、最初の一步を踏み出したのは、漢語の教育ルートに乗った才媛たちだ。その中には北京大学中文系を卒業した央珍（1963―2017）がいる。彼女が30歳のときに発表した『性別のない神』（原題『無性別的神』、中国青年出版社、1994年）は、「ラサ往時」（原題「拉薩往時」）というタイトルでテレビドラマ化されて人気を博した。他にも梅卓や尼瑪潘多、格央など、漢語で長編小説を発表しているチベット人女性作家は何人もいる。これに対してチベット語の長編小説が出るのはその20年後と大きな遅れをとっている。筆者の知る限り、これまでに刊行されたのは3作品のみだ。

その理由をチベットの男性作家が「女性に詩は得意だが小説は不得手」と説明したことがあったが、それはどうだろうか。実家が裕福で中国の大都会で暮らしているなら別だろうが、チベット地区の女性たちは、家事労働の担い手として、長い間進学を阻まれてきた歴史がある。そして運良く大学を出て作家や詩人を志しても、働きながら家事、出産、育児をこなさなければならず、才能と意欲があったとしても、時間と体力を要する長編小説の執筆に取り組むのは難しいのだ。だからこそ、翻訳して多くの人に読まれるようにすることで、エールを送りたい。そんな思いを強くする今日この頃だ。